

84. 道は「にわ」、「にわ」は家  
 ～高屋地区・学生のための住まいの計画～

06168054 為岡晃司  
 指導教員 市川尚紀 講師

居場所 学生の住まい 領域 内密性

1. 設計主旨

近年、計画敷地の在る高屋地区は大学の移転により学生が増え、学生向け賃貸住宅（学生アパート）の需要が増大し、土地を所有する農業従事者は田畑を埋め学生アパートを建設している。しかし現在建てられている多くのアパートのほとんどが運営効率的を考へるあまり同じ箱の横並びで方廊下の建物となり、それがいくつも点在する状況である。また内部のプランはプライバシーが確保されすぎ閉ざされ、同じ等に住む隣人の顔も知らない状況が生まれている。そのため犯罪を誘発しやすい環境となっている。

本計画ではアパートにおける学生の閉居によって起こっている学生間の関わりの希薄、セキュリティの不備を生活時間・生活空間の領域の取り方などの学生特有のライフスタイルに着目し、その性質を生かした新たな学生の居場所を提案する。

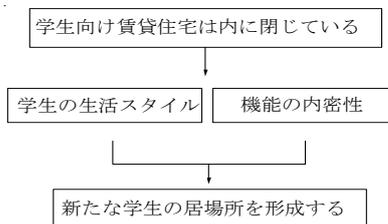


図 1 コンセプトダイアグラム

2. 計画地の概要

東広島市高屋町に移転した大学キャンパスからほど近い位置にある学生向けアパートの敷地を計画対象敷地とする。この地区は市街地から北東の方角に位置し、西条盆地の周辺に点在する小盆地のひとつに存在する。

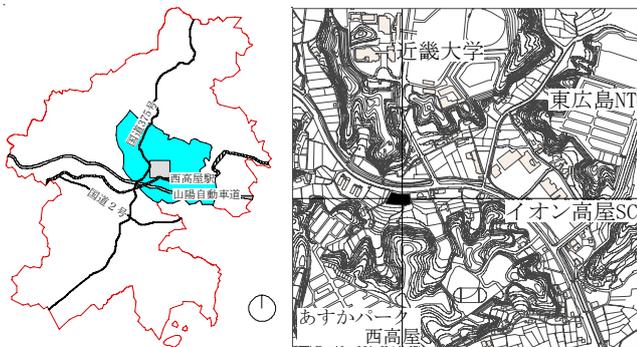


図 2 計画対象敷地

(1)気候

瀬戸内海気候に属し温暖・高乾である。計画敷地は山に囲まれた小盆地にはあり、そのため盆地特有の夜と昼、夏と冬で寒暖の差が大きい。

(2)社会環境

高屋地区は近年になって著しく発展した地区である。企業工場の誘致や東広島ニュータウン（高美が丘）などの住宅団地の開発や近畿大学広島キャンパスが移転し人口が増加した。

そして今日ニュータウンは時代と共に子供たちが成長し都市へ離れて行き、そこには一部の若者と団塊の世代の大人が残され、ニュータウンは衰退している。

しかし大学の移転により学生が増え、住宅の需要が増大し、土地を所有する農業従事者は田畑を利用し学生向け賃貸住居（学生アパート）の建設を始めた。

3. 計画内容

単なるワンルームの横並びの箱である学生アパートを学生特有の時間、生活領域といった学生の多様なライフスタイルの観点に着目し、新たな学生のための生活空間を提案する。

3.1 配置計画

(1)学生と生活タイプ

大学では1年から4年、院生と18歳から24歳までと幅広く生活時間もそれぞれ異なる。学校生活、アルバイト有無、友人関係により家での生活時間もさまざまとなる。

タイプ	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
Aさん	起床	通学	研究&授業	昼食	研究&授業	帰宅	家での時間													
Bさん																				
Cさん																				
Dさん																				

図 3 大学生の生活状況の図

street, "garden", "garden" is house  
 - A plan of housing for students in TAKAYA district-

TAMEOKA Koji

環境設計研究室

## (2)住戸開口と距離

スリット状の窓にし、その幅を変えることで窓の大きさを変えることになる。開口のあける向き大きさを住戸のタイプを 4 タイプに分ける

住戸にあげられた開口と対面する住戸の開口の関係によって住戸間の距離を決める。壁と壁であれば 1m 壁と開口であれば 2m 開口部同士であれば 3m とする。その住戸間の広さにより共有する「にわ」の広さがあいまいに決まる。距離をとることでプライバシーの確保にもつながる。

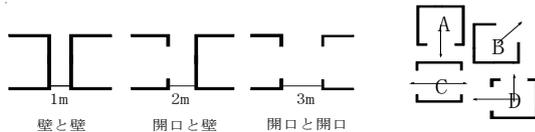


図 4 壁と開口部との関係図

## 3.2 空間計画

### (1)人とモノの領域

人の領域に対する意識は自身から何 c m、何 m かの距離内であると考えている。またそれはモノにも同じことが言え、ある一定の距離はそのものの領域と言える。

領域は人の意識によって形を変える。たとえば親しくない人が自分の領域に入り込むと不快を感じ、見知らぬ荷物には誰も近づこうとしない。空気の膜のようなものが人やモノの周りには存在している。

### (2)あふれ出る生活

現在、学生はアパートの 1K、1DK の小さな生活領域に閉じこもって住んでいる。そして居場所といえは約 3.6 × 3.6 (m) の箱の中である。学生はせまぜまとした閉じた空間で生活をしている。しかしその空間は学生特有のもので、時間をもてあました学生は時間を趣味に身を投げたり、友人と時を過ごす学生の部屋の中には学生の「色」があふれている。学生の居場所を「にわ」へと導く。「にわ」は学生の居場所のひとつであり、住民間の交流の場所である。

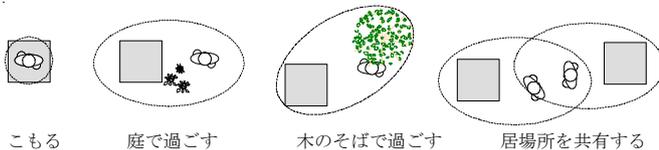


図 5 生活領域の広がりイメージ

### (3)空間の内密性といれこ

建築において壁という線によって内(in)と外(out)に分けられ、閉ざすか開くかのどちらかのように思える。空間を内と外で分けるだけではなく、もっと空間をあいまいに分けることは出来ないだろうかと思はれる。空間の内密性は機能により異なり、玄関→キッチン→私室の

順に高まると考える。そして人はその空間の内密性を選択して自らの「居場所」として生活をする。そして生活領域を変化させる。そこで、機能における内密性のレベルの違いにより「いれこ状」に住戸を構成し新たな空間を創る。

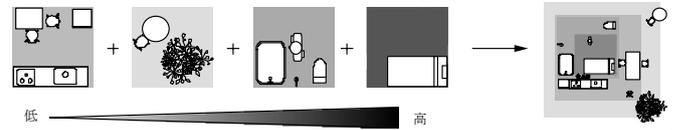


図 6 機能における内密性のレベル分け

### (4)曇りガラス

人やモノの輪郭をぼかし存在をあいまいに感じさせ、「ふわっ」やわらかくする。曇りガラスとの距離によりそれは変化し離れるにつれ輪郭はあいまいなものとなりモノの存在はガラスへと溶けていく。そしてそこにはモノや人の「色」のみが存在する。夜は部屋の中から光があふれる。曇りガラスを通した光はやわらかく敷地に広がりあたりを照らす。



図 7 仕切り方の種類

## 4. 総括

本計画は東広島市高屋町に移転した大学キャンパスからほど近い位置にある学生向けアパートの敷地を計画対象敷地とし、隣人との接点を無くしてしまった学生アパートを学生の特有の生活時間により敷地全体の防犯性を高め、住宅機能における内密性や領域の共有を考え新たな空間を創造することで空間の質を高め、学生の居場所を創る。今まで関わることのなかった学生の接点のきっかけとし、学生アパートが大学生生活の 4 年間で有意義なものとなることを期待する。

### 建築概要

所在地：広島県東広島市高屋町杵原

主要用途：集合住宅

構造・規模：RC 造・低層

敷地面積：約 2200 m<sup>2</sup>

計画住戸数：37 戸 (約 25 m<sup>2</sup>/戸)

### 参考文献

- (1) 東広島市企画部企画課編：東広島市 30 年の歩みと検証、pp.56-60 pp.121-125
- (2) 小林秀樹『集住のなわばり学』 彰国社 1992. 8